

2006 年度夏季遠征

アラスカ コバック川航行

報告書

期間：7 月 30 日（日）～9 月 16 日（土）

場所：アメリカ合衆国 アラスカ州

関西大学探検部

報告概要

事業名 関西大学探検部 アラスカ コバック川航行

事業地 アメリカ合衆国 アラスカ州 コバック川 (Walker lake～Noorvik)

日時 2006年7月30日(日)～9月16日(土)

計画目的

- ・極北の原野にて、コバック川 464 kmを航行する。
- ・コバック川流域でエスキモーたちの文化を調査する。

結果 計画目的を達成

隊員

CL	片岡賢佑	(工学部 3回)
SL	塚本麻衣子	(商学部 2回)
	木下祐作	(経済学部 3回)

隊所有のインマルサット (衛星電話により遠征隊に直通)

001-010-870-761213777

大阪連絡本部

水野浩 (関西大学探検部 OB)

住所 大阪府大阪市上本町2-1-102

電話 06-6945-6760 携帯 090-5122-1983

会社 06-6945-6760

現地連絡先

在アンカレジ出張駐在官事務所 (Consular Office of Japan)

住所 3601 C Street, Suite 1300

Anchorage, Alaska 99503

U. S. A.

電話 (001-010-1) 907-562-8424

非常時 (001-010-1) 907-244-5156

Fax (001-010-1) 907-562-8434

Email cjak2@ak.net

総括

果てしなく広がる極北の原野。大地には動物たちの足跡。夜空にはオーロラ。北緯66度北極圏。我々はアラスカ北極圏コバック川の航行を無事終えることができた。

航行中には熊をはじめとする数多くの野生動物たち、そしてツンドラの大地が見事に赤く染まる紅葉といったダイナミックな自然を感じることができた。残念ながらカリブーの季節移動には遭遇することはできなかったが、数多くの熊と遭遇し捕食者を意識し続けることによって謙虚により深くアラスカの自然を感じることができた。

中流域からはエスキモーの集落が存在しているが、彼らの生活は予想どおり白人化していた。あらゆる物資は都市から空輸で運ばれ、生活必需品は何一つ不自由なく村の店で買うことができる。政府からの先住民保護の生活保障で働く必要がないためか、酔っ払いや薬物中毒者で治安も良くなかった。そんな中、今なお続いている昔からの生活といえば狩猟であった。網でサーモンを獲り、野山でカリブーを追い回す。酒に浸り薬物におぼれる者もこのときばかりは生き生きとしていた。

この報告書は26日間の航行生活で見聞きしたもの、それぞれが感じたものを現在のアラスカの姿として記録したものである。

最後になりましたが、OBをはじめとする関係者皆様のご理解ご協力に感謝します。

CL 片岡賢佑

隊員紹介

隊長

片岡賢佑

2004 年工学部入学

奈良県田原本町出身



◇ カナヅチながらも川をこよなく愛する。2005 年モンゴル・オルホン川航行に参加。その帰国後すぐにアラスカ遠征計画を発表。北の大地に憧れるも、寒さには人一倍弱く、春の訓練合宿から一人しもやけに悩まされる。今遠征で最大の危機であった Ambler 村・酔っ払いエスキモーからの逃亡*などの荒波を乗り越え、素早い判断力と行動力で隊を引っ張ってきた。

副隊長・食糧係・会計係

塚本麻衣子

1980 年 10 月 2 日生 A 型

2005 年商学部入学

兵庫県三田市出身



◇ 本隊唯一の女性隊員。入部当初はアマゾンへの熱を燃やしていたが、片岡の洗脳によりアラスカへ赴く。春の訓練合宿では雪の降りしきる寒空の下 12 回という転覆記録を樹立するもめげずに突き進む。アラスカ遠征では語学力を生かし外交官として活躍する。グリーズリーの生息するブッシュへ単身、臆することなく分け入ってくといった本隊一の肝っ玉の持ち主でもある。居酒屋勤務で酒をこよなく愛す我が部一の酒豪。どこでも熟睡することができる特技を持っている。

装備係・医療係・撮影係

木下祐作

1984 年 12 月 1 日生 B 型

2004 年経済学部入学

大阪府大阪市出身



◇ 6 尺の長身をほこるシティーボーイ。04 年四国吉野川で激流の洗礼を受けるも再び川へ舞い戻ってきた。料理人の父を持ち本隊でも裏料理長として腕を振るう。耐寒能力がずば抜けており、寝袋の限界温度プラス 5℃まで耐えることができる。安定した運動能力とどっしりと構えた態度により隊の参謀的役割を果たす。現在 09 年卒業に向け目下邁進中である。

地域概要

アラスカ州

北米大陸の西北端に位置するアメリカ最大の州である。面積は日本の4倍強であり、そのほとんどが手つかずの自然である。そこにはグリズリーや世界最大の鹿ムース、カリブーといった野生動物が数多く生息している。北緯66度33分より北は北極圏で一年の大半が氷点下の世界である。また、アラスカ州にはエスキモーをはじめとする先住民族も多数生活している。

コバック川

北緯68度のブルックス山脈を源としチュクチ海までの約480kmを北緯66度33分線と平行に流れる。今回は上流部分のウォーカーレイクからNoorvikまでの450kmを航行した。湖の出口すぐに5級の瀬があり、他にもUpper Kobuk Canion(1級) Lower Kobuk Canion(3級)と上流部分に大小の瀬が点在する。中流～河口にかけてはKobuk、Shungnak、Ambler、Kiana、Noorvikの5つのエスキモーの村が存在する。流域はツンドラの平原のため陸路はない。

現地時間

日本の18時間遅れ。ただし、4月～10月はサマータイムのため17時間遅れ。

気象情報

フェアバンクス (64° 50' N)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最低平均気温(℃)	-27	-27	-20	-8	2	8	10	8	2	-9	-22	-26
最高平均気温(℃)	-18	-14	-5	5	16	20	22	19	13	-1	-12	-18
降水量(mm)	11.8	10.3	9.4	8.1	15.5	34.7	47.4	49.8	24.3	23.0	20.2	21.2
平均日照時間	5:07	8:31	11:41	15:10	18:39	21:39	20:11	16:35	13:06	9:47	6:19	3:49

ノーム (64° 20' N)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最低平均気温(℃)	-20	-22	-20	-14	-3	3	7	7	2	-5	-12	-20
最高平均気温(℃)	-11	-12	-10	-4	4	12	14	13	8	1	-7	-12
降水量(mm)	19.9	20.4	13.7	17.3	15.8	28.3	54.5	68.8	61.8	34.1	26.2	21.1
平均日照時間	5:16	8:34	11:41	15:08	18:29	21:21	20:00	16:31	13:05	9:48	6:25	4:00

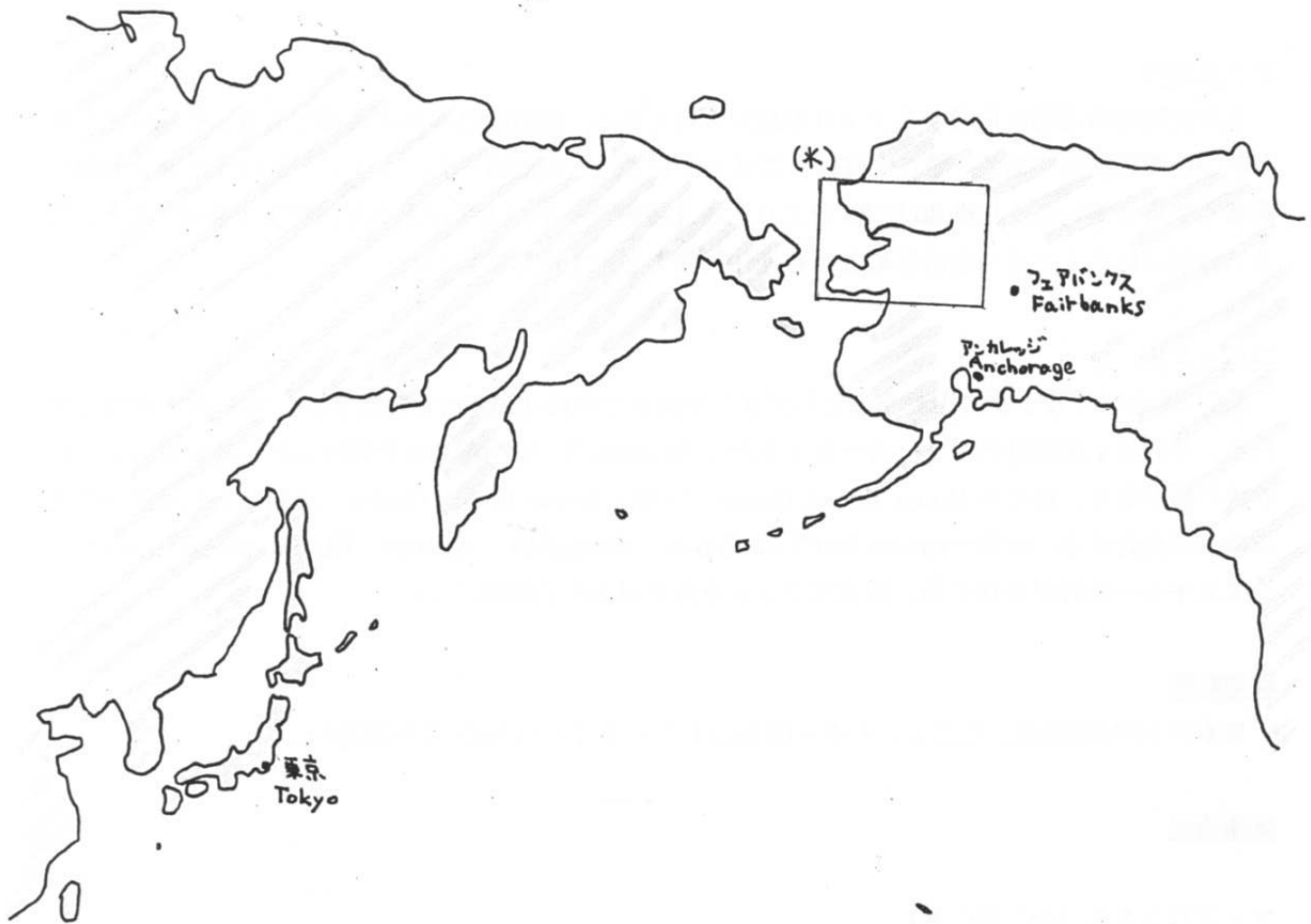
単位

インチ (1inch=2.54cm) フィート (1feet=30.48cm) マイル (1mile=1.6km)

オンス (1ounce=28.35g) ポンド (1pound=453.6g)

カ氏温度 ($9/5 \times \text{℃} + 32$)

地域概念図



流域拡大図 (*)



トレーニング経過

企画してから1年足らずで実行の遠征であった。企画段階では長期間の河川航行経験者は片岡のみであり、隊の川の経験値を上げる必要があった。そのため季節を問わずトレーニングに励んだ。以下にそれらのトレーニング経過を記す。

2005年

11月

加太・友ヶ島水道 片岡(2)、木下(2)、塚本(1)

計画が始動して1ヶ月余り。この3人で初の練習。この段階では海も視野に入っていたので和歌山県友ヶ島でシーカヤクトレーニングを行った。加太港をスタートし友ヶ島を一周した。川のように流れる潮流を始めて目の当たりにしアラスカでの海の航行に疑問を感じた。

12月

由良川 片岡(2)、木下(2)、塚本(1)

数々の情報収集の結果、航行地をコバック川に決定。以後、川の航行練習にひたすら励む。由良川では膝までの積雪の中訓練を行った。ファルトボートとインフレータブルカヤックを用意したが、凍結のためファルトボートを組み立てることができず片岡、塚本のみインフレータブルカヤックのみで出航した。出航して間もなく岩を避けきれずに張り付いてしまう。ボートは翌日無事に回収できたが隊員のスキルアップと寒さ対策が今後の大きな課題になった。

2006年

1月

奈良吉野川 片岡(2)、木下(2)、塚本(1)

由良川の失敗を受け、個々のスキルアップを図るために一人一艇ずつで挑んだ。各隊員とも転覆しつつも思い思いの試行錯誤を重ね切磋琢磨した。また今回より居住テント、倉庫テント、炊事場をそれぞれ50m以上離して設営するといった熊対策を実行した。

2月～3月

五川一湖航行合宿 片岡(2)、木下(2)、塚本(1)

遠征の予行練習として寒中、長期間、長距離を航行した。日本の川は短いためいろいろな川をはしごして37日間470km漕ぎきった。由良川の失敗を受け使用艇はインフレータブル2艇で行った。

- 琵琶湖

コバック川の流れのなくなった下流部での航行を想定して行った。コースは大津から長浜まで反時計回り。だっ広い湖面をただひたすら漕ぐのは精神的につらかった。航行自体は風いでいる日が大半であったため苦労はしなかったが、日照時間が大変短く、暗いうちからの航行準備は辛かった。

- 木曾川

静水から川へ。ライン下りのスタート地点であるライン公園からスタート。豊富な水量により瀬場でも流れは速い。瀬はパワーのあるものが多い。最大の瀬「富士ヶ瀬」ではセーフティーコースを取ったにもかかわらず水の壁が頭上から覆いかぶさり肩慣らし的な感覚で挑んだ隊員たちの度肝を抜いた。

- 長良川

中部の本格的な激流へ。片岡、塚本は以前航行した経験があったが増水、多量積載によりその経験が役立たず、数多くの転覆を味わった。装備が粗末であった木下は軽い低体温症に陥った。計画段階では1日で終わるはずであった激流区間が度重なる沈により2日かかってしまった。長良川以降の激流区間でも同様に予定より時間がかかってしまった。その結果、激流区間の航行距離は1日12kmほどで計算するといった結論に達した。岐阜からの後半は流れもほとんどなくなりただひたすら漕ぐのみとなった。

- 飛騨川

中山七里、飛水峡の航行を予定していたが、雨天雪解けによる増水ため飛水峡の航行はできなかった。道路わきの天真白菊の塔でダムの放水が泊まるのを数日悶々と待っていた。結局航行できなかったがこの時に経験したロングポーターは遠征でも大いに力になった。上流部分の中山七里は岩のたくさん絡んだ滝のような瀬が多かった。飛騨川あたりから転覆にもかなり慣れ、落ち着いて確実にリカバリーできるようになってきた。

- 千曲・信濃川

仕上げとして日本最長の大河を航行した。上流の長野県部分を千曲川と呼び、新潟県に入ると信濃川と名前を変える。北アルプスを眺めての穏やかな流れは快適であったが、中流山間部の激流区間は想像を絶するものであった。雪解けでの増水でこの時期のみに姿を現す激流により、幾度となく雪の浮かぶ冷水の中に放り出された。水温の低さは他のどの川も比較にならず冷たいというより痛かった。あまりの寒さに凍傷に悩まされた。兩岸に2mの雪の壁で、上陸、設営に大変苦労したが河口に近づくにつれて雪はなくなっていった。本当に変化に富んだ川であった。本当に辛かったがこの航行を完遂したことは遠征に向けての大きな自信となった。

5月

熊野川航行合宿 片岡 (3)、木下 (3)、塚本 (2)、平井 (1)

遠征前の最終調節。まったく同じ装備を用いて行った。新入生歓迎も兼ねて楽しみながらのんびりと航行した。春合宿で過積載による転覆が多かったため使用艇を3艇に変更した。

全体行程

日付	内容
7 / 30	大阪出発。成田へ移動
31	成田 ⇒ Fairbanks
30* ～	Fairbanks 滞在。食糧買出しなど。
8 / 7	
8	Fairbanks ⇒ Bettles
9	Bettles ⇒ Walker Lake
10 ～	Kobuk 川航行
9 / 3	
4	Noolvik ⇒ Fairbanks
5 ～ 13	Fairbanks 滞在
14、15	
16	成田 ⇒ 大阪 解散

* 時差のため Fairbanks 到着は7月30日である。

コバック川航行距離表

日付	地名		距離
8 / 9	Walker Lake	C 1	0km (累計 0km)
10		C 1	
11		C 2	5km
12		C 2	
13	Kobuk Canyon	C 3	45km
14		C 4	55km
15		C 5	35km
16	Kobuk	C 6	40km (累計 180km)
17		C 6	
18		C 6	
19	Shungnak	C 7	17km (累計 197km)
20		C 7	
21		C 7	
22		C 7	
23		C 8	40km
24	Ambler	C 9	46km (累計 283km)
25		C 9	
26		C 9	
27		C 10	17km
28		C 11	34km
29		C 12	41km
30		C 13	30km
31		C 14	29km
9 / 1	Kiana*	C 15	15km (累計 449km)
2		C 16	28km
3	Noorvik	C 17	17km (累計 494km)

総航行距離

494km

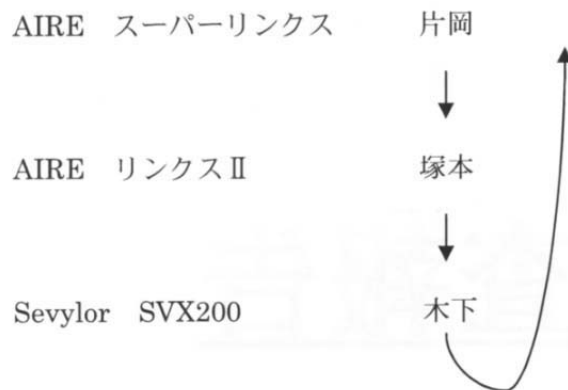
* 治安悪化のため9月1日は Kiana には滞在せず、少し離れた中州に設営。

航行中のライフサイクル

- コバック川航行時の生活サイクルはおおむね以下の通りであった。

AM	6:00	起床
	7:00	朝食
	8:30	航行開始
PM	0:00	各自船上で昼食
	5:00	上陸
	7:00	夕食
	10:00	就寝

- 使用カヌーは日替わりで以下のようにローテーションしていった。



調查報告

エスキモーの狩猟生活

片岡

目的

コバック川流域エスキモーの狩猟生活について調査する。

調査内容

- ◆ 獲物の種類とその獲物の狩猟方法
- ◆ 今と昔の狩猟方法の違い
- ◆ カリブーフエンスの搜索

結果

獲物の種類とその獲物の狩猟方法

コバック川流域のエスキモーは陸獣、魚類、木の実を採って生活している。陸獣では主にカリブー、ムースを狩る。Kiana村のエスキモーの話では5人家族で1年間にカリブー9頭、ムース1頭を狩るとのことである。これらは食べるだけでなく、毛皮は衣類、角は彫り物などに余すことなく利用される。また、稀に熊も狩る。ブラックベアーは肉、毛皮とも利用するが、グリズリーは毛皮だけ利用し肉は食べない。この他にも毛皮を目的としてキツネ、リスなどをとる。カリブー、ムースは銃を用いて獲る。キツネやリスは罠を用いる。熊は銃と罠の両方を用いる。猟場への移動には、夏場は川を利用してモーターボートで、冬場はスノーモービルを用いる。

魚類は全てコバック川で獲れた物である。チャムサーモン、シーフィッシュ、パイク、グレイリング、ホワイトフィッシュがいる。中でも最も多いのがチャムサーモンだ。遡上の季節に定置網を用いて獲る。川が凍ると氷に複数穴を開けて水中に網を張る。この獲物は主にシーフィッシュである。他にもワカサギ釣りのような方法もある。釣りも行われるが漁というより娯楽的要素が強く、村々では釣竿片手に歩く子供たちをよく目にした。釣り方はルアーフィッシングである。現地の釣り人、私の体験からスプーンが最も有効だった。最も釣れるのはグレイリングで居るところに投げれば必ず釣れる。

木の実にはブルーベリー、クランベリー、ラズベリーが採れる。8月中旬から9月にかけて採れる。狩猟が男性の仕事であるのに対し、これは女性の仕事である。Kuspukと呼ばれる蚊よけのパーカーを着用してこの仕事意励む。

今と昔の狩猟方法の違い

現在、狩猟の主役は銃であるが、以前は槍や矢であった。また、スノーモービルやモーターボートもなかったため犬ぞりとカヌーで移動した。今では犬ぞりは競技目的のみになり、カヌーは全く見かけなくなった。Kiana 村のエスキモーの話では、昔は中流域にある Ambler 村までシロイルカをはじめとする海獣が生息していたとのことである。

カリブーフエンスの搜索

カリブーフエンスを発見することはできなかった。聞き取りをした限りではその存在を知る人さえいなかった。

総括

都市からの空輸が容易になった現在、狩猟の重要性は以前より減った。獲物を狩らずとも生活できるのである。しかし、彼らは今なお狩猟を続けている。それはなぜなのか？私は狩猟こそが彼らの生きがいではないかと考える。元々エスキモーは狩猟民族であった。自ら仕留めて自ら食べる。その文化が今なお生き続けているのである。

今回の調査で最も興味深かったのは川の中流まで海獣が上ってきていたという話だ。現在コバック川流域で海獣類は獲れない。しかし、流域の人々にアザラシの脂肪をドロドロにした物であるシールオイルについて聞いたところ、好物だと答える人が大半であった。資料によると、このシールオイルは癖があり食すのに慣れが必要なものらしい。にもかかわらず、内陸の彼らがシールオイルを好物とするのはこの話を裏付けるものではないだろうか。

時代の流れによってエスキモーを取り巻く自然、生活は日々変化し続けている。しかし、彼らがエスキモーである限り狩猟は彼らの生活の根底にあるものであると私は感じた。

“食”から知るエスキモー文化 塚本

目的 内陸エスキモーの伝統料理(食材)を自ら味わい、その調理法を記録に残す。

以下に、調査結果を記す。

今合宿で食した食材(料理)

●スモークサーモン

各村やフィッシュキャンプなど、どこでも作られていた食材。サーモンにも様々な種類があるが、今合宿で見かけたのはチャムサーモンのみ。犬の餌にすることから、別名ドッグサーモンとも呼ばれる。

スモークサーモンと言うが、乾燥させるだけのものもある。天気が好ければ1週間ほどで乾燥する。ただ半生のものを野菜と一緒に煮て食したりもするようである。味付けは塩コショウとガーリックソルトを用いていた。薄味だが素材の旨みがとても引き出されていて、美味しかった。

またスモークサーモンは河口に行けば行くほど、脂がのって美味しくなる。

●その他の魚

やはり川沿いであるため、様々な魚が食されていた。

ホワイトフィッシュという魚もサーモンと同様に乾燥して、身は人が食し、骨は犬の餌となっていた。またこの魚の卵も干して食すようである。食感はプチプチとして、少し苦味があった。話しによると、この卵をフィッシュオイル(どんなものか不明)につけて食すと美味しいらしい。

パイク、シーフィッシュは冷凍保存したものを食した。シーフィッシュは色々な人から美味と絶賛されていたが、私自身、白身魚の味という印象しか受けなかった。

●ムース・カリブー

8月半ば頃から、魚以外にムースやカリブーなどの肉がスモークされるようになる。

ある家庭では、ムースは塩とガーリックで下味をつけてからスモークしていた。肉自体の臭みが少ないのか、下味の効果か、臭みもほとんどなく、ビーフジャーキーのようで美味しかった。

カリブーは下味せずにスモークする。若干くせがあるが慣れると美味しい。またカリブースープも食した。カリブースープはカリブーを米、パスタ、ジャガイモと一緒に、味付けは塩コショウだけで煮込むという主食に近いスープである。カリブーの臭み消しのためか、コショウがかなり効いている。そのおかげか、臭みもあまり感じず、

肉の旨みが十分に出て、コクがあって美味しかった。

●ブルーベリー

そのままでも十分美味しいが、冷凍したものに砂糖をかけて食べるととても美味しい。またジャムにもする。

コバック川周辺のエスキモーの食文化

今回調査したところ、魚も肉類も必ず何らかの調理がされていて、生のまま食す、という文化はなかった。また目にすることはできなかったが、皆シールオイル(アザラシの脂肪を溶かしたもの)を知っているばかりか、好物だと答える人もいたことから、他の海産物もコバック川周辺に流通していたかもしれない。

またどの村にも1軒は店があり、色々な食材が簡単に手に入るようになっていた。子供たちがチョコレートやジュースを買っていく姿、主婦がパンを買っていく姿をよく見かけた。全てを獲物に頼っている生活はもう存在しなかった。

総括 今回最も心配していたのは白人文化の流入により、エスキモー独自の文化が全て失われているのではないか、ということであった。しかし実際に調査を進めていくうちに、確かに失われたものもあるが、食文化というものは人間の最も根本的な文化のようで、簡単には失われないものだという実感を受けた。この先どんなに便利で、狩りなどしなくても簡単に食糧が手に入る世になっても、エスキモーたちはサーモンやムース、カリブーを獲って生活していくであろうと思う。

ただ人間が変わらなくても環境が変わり、獲物が獲れなくなる時がくるかもしれない。その時こそ、白人文化が流入しても消えることのなかったエスキモー文化が完全に途絶えてしまうのではないか。「その時」は確実に近付いてきている。それを食い止めることができるかが、大きな課題なのではないだろうか。

目的

内陸地におけるカヤック、カヌーの調査

調査方法・成果

Kobuk 村、Shungnak 村では村周辺にかつて使用されていたカヌー、カヤックがないかを歩き回って調査するという消極的なものであった。いくつかボロボロに朽ち果てた木造の船を見かけたが、それらは全て後部にエンジンを積み込む形状の船であり、結果としてどちらの村にも目的の物は無く、村人に尋ねてみるも「無い」、「知らない」といった返事であった。

Ambler でもこれまでと同様の村周辺を歩き回っての調査は全く成果を挙げる事は出来なかったが、様々な世代の村人に接触しカヤックに関する質問をする事で多少の成果を得た。30~40 代やそれ以下の年代の村人に尋ねてみると、カヤックは海で使われていて川では使われなかった、と教えてくれたが、50 代後半と見受けられる年配の方に尋ねてみると、Ambler 周辺でも過去にカヤックが猟場やフィッシュキャンプへの移動に使われていたという情報を得た。以下にその詳細を記す。

・船体皮には海獣の皮ではなく、木の皮を用いる

かつては内陸部では当然海獣の皮は手に入りにくく、そのため木の皮を用いてカヤックを造っていたようである。お話を伺った方の家にはなめした木の皮で作った小物入れや写真の額縁等が多数あり、それらを持って「これの大きいのがカヤック」と事も無げに教えてくれた。

・使用されていたのは 1960 年辺りまで

これは事前に得ていた情報通りで、やはりコバック川周辺も 1960 年代に文明が流入し伝統的な文化が薄れていったようである。また、使用されないどころか 30~40 代と思しき人が「ここには無い。カヤックは海に行けばある」と言った事から木のカヤックの存在を知らないという事になる。単にからかわれただけの可能性もあるが、少しぐらいは親から子へ昔の話をしても良さそうなものだが、それすらも無い程に文化が薄れていっているのだと感じた。

総括

途中、身の危険を感じて村を一つとばすアクシデントがあったが、日本での事前の調査の段階では知らなかった木の皮のカヤックの存在を知ることが出来た。耐久性を始めとする性能や材料についてももう少し詳しく話を聞きたかったが、語彙力、社交性の無さから結局突っ込んだ話が出来ないまま Ambler から逃げ出してしまった事が悔やまれる。

しかしながらお互いの文化や風習について話しながら親交を深めることが出来たのは貴重な体験であり、カヤック、カヌーの調査を通じて交流を深めるという点では個人的に満足のいく結果であった。

各務報告

装備報告 木下

装備総括

今合宿では合計約150kg、1人当たりで50kgにも及ぶ莫大な量の装備品を使用した。食糧品をあわせると250kgを超える途方も無い重さだが、船を3艇用いて下る、という決断がその計画を実現可能にした。当初は2艇しかなかった船の3艇目の購入を理解してくれた部員の皆にはただただ感謝するばかりである。

上記の通り3艇の船を使用する事によって積載量に必要以上のゆとりができたため、重量や体積はさほど気にせずに計画を組む事ができ、その結果として移動の際には苦勞をさせられたが、事前の訓練合宿では頻出であった装備面での大きな問題は特に無く合宿を成功させることができた。

紛失・欠損

今合宿中に紛失、破損したものとその反省を以下に記す。

品名	日付	箇所・状態	原因	合宿への影響
ウェットスーツ	8/15	紛失	休憩時に置き忘れる	特になし
釣具	8/16	釣り竿が折れる	現地の少年に折られる	特になし
浄水器	8/24	フィルターが詰まる	川の汚濁	以後、使用不可
セビラーSVX200	9/1	船底部右側の内部破損	空気の入れすぎによる パンク	特になし
防水ザック	不明	大小多数の穴、破れ	粗末な扱い	度々浸水があった

釣具…エスキモーの少年が釣り竿で遊んでいた際に破損。しかし以後村やフィッシュキャンプでサーモンを頂く機会が何度かあり、釣果もあまり期待できなくなっていたため特に影響はなかった。

浄水器…川の水が雨による増水でかなり濁っていたため、予想より早くフィルターが詰まり使用できなくなった。そのため以後は飲料水、調理用水共に煮沸のみでの使用となった。理論値ではまだ数百Lの浄水が可能であったが、これは予想できた事である。替えのフィルターは安価でごく小さな物であるので用意しておくべきだった。

セビラーSVX200…SVX200の船底部は2つの気室に分かれており、片方がパンクしても若干の速度の減少や船の傾き、浸水といった不具合はあったが影響はごく僅かであり、また合宿終了も目前であったため修理を後回しにして航行を継続し、問題無く漕ぎ切る事ができた。

しかし以前の合宿においても同様の原因での破損が2度あり、今合宿でも特に注意していたが終盤の気の緩み、以前破損した箇所とは違うという安心感もあってか、以前と同じことを繰り返してしまった。この点は反省しなければならない。

防水ザック…合宿開始前にも幾つかの穴が空いており、出発直前に繕ってはみたものの、往路の飛行機や航行中にそれらの穴が再び開き、その内いくつかは拡大してしまい浸水、それにより後半深刻であったたまねぎの腐敗に拍車をかけてしまう等の被害にあった。

また、復路の成田ではFairbanksでは見られなかった大小様々な傷が見られ、内一つは二度と防水ザックとしては使用できない程破れていた。空港の職員による雑な扱いが原因と思われるが、これは大いに有り得る事であり、何らかの対策を講じる必要があった。

その他

・ベアスプレー携帯用としてウエストポーチを用意したが、購入したベアスプレーにホルスターがセットで付いていてその点ではあまり意味はなかったが、航行時、非航行時共に小物入れとして大いに役に立った。またベアスプレーを常時忘れずに携帯できるかという懸念が計画段階ではあったが、熊や熊の足跡を頻繁に見かけるといった状況下ではベアスプレーを忘れるといったことは皆無に等しかった。

・また悪天候時の調理の際には士気低下を防ぐためタープを用いるという計画であったが、中盤以降は雨がほとんど降らず、降った場合も調理自体を行わないという対策をとったためタープは一切使用しなかった。

尚、タープ自体はテントマットと兼用の物を用意したため積載面での影響はなかった。

・熊対策としてテントを居住用と食糧・装備等を入れる倉庫用の2つに分けた。そしてさらにそのテントに目印を付け居住用と倉庫用を区別することで、効果の程は確かではないが熊対策の徹底化を図った。

各装備について

今合宿で使用した各装備の使用頻度、評価及び詳細を以下に記す。

使用頻度：使用した頻度。

◎…毎日使用した ○…よく使用した ▲…時々使用した △…稀に使用した ×…全く使用しなかった

評価：重量、体積、コスト等に見合うだけのものであったか、不都合な点があったかどうかの総合的な評価。

(テントや船等、無くてはならないものでも便宜上改善の余地があるか否かの観点から評価を行った。)

◎…必要不可欠 ○…持って行って良かった ▲…持って行って損は無い △…無くても良い ×…無い方が良い
(非常に良い) (良い) (普通) (悪い) (非常に悪い)

団体航行装備

品名	使用頻度	評価	備考
スーパーリンクス	◎	◎	直進性、快適性、耐久性の全てにおいて問題なし
SVX200	◎	▲	抜群の直進性を誇るも、船体に水が若干溜まる構造になっておりやや快適性に欠ける。内側からの圧力に弱く、空気を入れすぎると簡単にパンクするので注意が必要
リンクス2	◎	▲	短く幅広の船体で直進性に乏しく、今合宿では一番の不人気艇であった。他の2艇もそうであるが、それらと比べても圧倒的にホワイトウォーター向き
ダブルパドル	◎	◎	4ピース。航行中の破損は無かったため、合宿を通してこれのみを使用
ダブルパドル(予備)	×	◎	3ピース。シャフト部が金属製の丈夫なもの。唯一現地の子供達遊びで使用
スローロープ	×	▲	使用せず
リペアキット	△	○	船体皮、やすり、接着剤、へら。接着剤のみ防水ザックの修理に使用

団体標準装備

品名	使用頻度	評価	備考
インマルサット	▲	◎	衛星電話
GPS	◎	◎	航行時に1~2回/日 現在地確認の為に使用。序盤は特に役に立った
地図	◎	○	航行中常に使用。50万分の1で十分現在地の把握が可能だった
テント (プロモンテ K-404)	◎	◎	登山用テント4人用×2。安さに重点を置いて購入したが特に問題はなかった
テントマット	◎	▲	タープにもなるクッション性に欠けるマット。気休め程度の効果はあった
タープ	×	×	雨天時の土気低下を防ぐ目的だったが、雨天時はタープを張る土気すらなかった
MSR XGK	◎	◎	圧倒的な火力で素早い調理が可能。ストーブは主にこちらを使用した
MSR ドラゴンフライ	▲	○	細かい火力の調節が可能で、米を炊く際に使用。頻繁に故障するので注意が必要
MSR ガソリンボトル (11oz)	◎	○	飛行機に持ち込めないため現地購入。安さ優先で最小のものを2つしたが、最小なので度々補給をしなければならなかった。もう一回り大きくても良かったように思う
浄水器	○	○	MSR社製 スイートウォーター。中盤に故障するまで活躍
コッフェルセット	◎	◎	大(約4L)、小(約2.5L)の鍋セット。3人での使用はこのサイズで丁度であった
フライパン	○	◎	主に魚を調理する際に使用。それ以外の様々な食材にも対応
金盆	○	○	アルミ製。まな板や切った食材の置き場として意外と役に立った様に思われる
パール	◎	○	アルミ製。熱伝導が高いのが難点
おたま	◎	◎	調理、取り分けに使用。大きい方が良い。麺類の取り分けには技術が必要
アウトドア用洗剤	◎	◎	髪から食器まで何でも洗える洗剤。非常に重宝した
ロールペーパー	▲	○	今合宿ではほとんど単一の目的にしか使用されなかった
ガムテープ	△	×	現地購入。誤って粘着度の低いものを購入してしまい、全く使えなかった
釣具	○	◎	安い釣具セットを現地購入。しかしこれで10匹以上の魚を釣り上げた
鏡	○	○	主に身だしなみを整える際に使用
ポリタンク(2l)	◎	◎	主に煮沸した水の保存に使用
ポリタンク(10l)	×	×	一切使用しなかった。しかしコンパクトに畳めるのでそれほど邪魔にはならなかった
ペットボトル	◎	◎	飲み水の分配用。実際は耐久性に優れた専用のボトルを使用
防水ザック	◎	○	計4つ使用。ファスナータイプのものが開け閉めし易く、食糧用として活躍
ペリカンケース	◎	○	インマルサット、GPS等を収納。重量、持ち運び易さにやや難有り
背負子(ボート運搬用)	△	○	アルミ製
台車(ボート運搬用)	△	▲	往路の成田で台車自体が一つの荷物扱いになったため隊員宅へ送り返す
ストラップ	◎	◎	ボート運搬時の台車等への固定、航行時の荷物のボートへの固定に使用
ガソリン	○	○	約11L購入。最終的には半分弱が余った
ガソリン用タンク	▲	×	容量約8L。雑な作りで中身が漏れる事も多く、完全に失敗であった
辞書	○	◎	電子辞書1つのみで十分事足りた

個人航行装備

品名	使用頻度	評価	備考
ウェットスーツ	△	△	C2～C3の一日しか役に立たなかった。その日以外は着用して得られる利点よりも、着脱の際の難点の方が大きかった
ライフジャケット	△	▲	同上
パドルングジャケット	▲	○	使う機会も多少はあったが、今回はカッパで代用が可能であった
カラビナ	○	◎	個人管理制に変更したためか、深刻な問題だった紛失は無かった
ホイッスル	×	▲	全く吹かなかった
ウエストポーチ	○	▲	便利ではあるが、ポーチごと紛失した前例があるので注意が必要。大きい方が良い
帽子	○	◎	かなり日差しが強かったため、片岡隊員を除きほぼ毎日の使用であった
防寒着(航行時用)	—	▲	序盤に航行装備に着替えなくなったので、以後は普段着として使用

個人標準装備

品名	使用頻度	評価	備考
シュラフ	◎	◎	3シーズン用のものでもシュラフカバーを使用すれば問題なかった
シュラフカバー	◎	◎	透湿性、防水性のあるもの
マット	◎	◎	現地購入。塚本隊員のみエアーマット
ベアスプレー	×	◎	有事の際に役立つのかは疑問だが、対抗手段があるという点が精神的に重要であった
ライター	◎	◎	使い捨てライター
ナイフ	◎	◎	調理用
ヘッドランプ	△	▲	LEDヘッドランプ。日照時間が長いため、ほとんど使用する機会は無かった
ろうそく	×	△	一切使用しなかった
軍手	◎	◎	通常の軍手
細引き	○	◎	荷物の固定から魚の保存まであらゆる場面で使用
防寒着	○	○	予想していた程は冷え込まず、最後まで着用しなかった物もあった
雨具	▲	◎	カッパ
防虫ネット	▲	◎	序盤はこれ無しではテントから外へは出る事が出来ない程であった
ドライバッグ	◎	◎	個人装備を全て詰め込む事によって、船への積載が容易になった
ビニール袋	▲	▲	ドライバッグがあったので、現地の買い物袋のみで十分足りた
コンパス	◎	◎	シルバコンパス
洗面具	◎	○	日本にいたときよりも身だしなみには気を遣った
裁縫道具	×	▲	今回は特に使用しなかった
マップケース	◎	◎	防水のポーチをマップケースとして使用

食糧報告 塚本

朝食は雑煮と味噌うどんのローテーション、昼食はチョコバーとパイロットビスケット、夕食はカレーライスとパスタのローテーションであった。飛行機の積載量等の事もあり、計画時より全体的に量を減らした。その為、合宿前半は食糧を節約していた。しかし雨天の時や、村での滞在期間中は殆ど調理をしなかった為、最終的にかなりの量の食糧が余ってしまった。またルーの種類が余りなく、味がワンパターン化してしまった。現地はルーよりも缶詰にされたソースや粉タイプの物が多く、今回は使用しなかった。

今合宿の食糧総量を以下に記す。

ジャガイモ	31.71kg	カレールー	20 箱
タマネギ	13.62kg	ビーフシチューミックス	4 袋
ニンジン	6.81kg	味噌	1kg
ニンニク	6 個	醤油	1 本
乾燥ワカメ	2 袋	コンソメ	1 本
米	12kg	だしの素	30 袋
餅	6kg	鰹節	1 袋
パスタ	6.8kg	バター粉	57g
きしめん	3.4kg	塩コショウ	1 本
チョコバー	133 本	サラダ油	1 本
パイロットビスケット	3 箱	紅茶	1 箱
		グリーンティー	1 袋

食糧総重量：94,447kg

● 個々のメニュー・材料について

・カレーライス

2日に1回のペースで食べていたにも係わらず、飽きられる事もなく、常に好評である。特に合宿後半のもらったカリブー・ムースの干し肉を使って作ったカレーは絶品であった。干し肉を水の時点から入れておくと、程よく戻り本当の肉のようであった。またアラスカにはS & Bのルーしかなく、あまりコクがなかった。

・パスタ(ビーフシチュー味、カレー味)

最初は調理時間の短さから朝食メニューであったが、後に夕食メニューに移行する。今合宿ではスパゲッティーとマカロニを使用。マカロニは食べやすいが入れ過ぎに注意すべきである。スープを吸いすぎて入れた量とは比べ物にならないほど増加する。味付けにはコンソメもあったが日本のコンソメとは少し違ったので、口に合わない者も居たため、コンソメ味は却下された。ビーフシチューの素は少なすぎるとトマト味が強くなり、これも好みが分かれるので、多めに入れた方がよい。

・味噌うどん

フォーの代わりにきし麺を購入したため、味噌うどんになる。春合宿では不評であった

乾燥うどんだが、このきし麺はとても美味しく、好評であった。

- ・雑煮

日本から餅を持っていったが、やはりアラスカでは見掛けなかったので、持って行って正解であった。味噌うどんといい、やはり食べ慣れた味噌の味は良かった。またサーモンの頭と一緒に煮込んだ時は、絶品であった。

- ・昼食

前半はチョコバー1本とパイロットビスケット2枚という、かなり寂しい行動食となってしまった。航行に支障が出ることはなかったが、空腹感是否めなかった。日本のカロリーメイトのような物がなく、代用としてチョコバーを起用した。甘すぎるかとも思ったが、嗜好品代わりとしてもなかなか好評であった。現地ではよく食べられているパイロットビスケットであるが、味は殆どなく素朴な味であるため、好みは分かれた。しかし、腹持ちは良かった。現地の人々は昼食に、鮭の缶詰やマヨネーズ、バターをのせて食べていた。

- ・その他

嗜好品として持っていったグリーンティーは水に溶かすだけと簡単で、味も良いため、紅茶よりもよく飲まれた。そして今回魚用に購入したバター粉だが、ジャガイモやパスタ、カレーにかけるなど、用途は幅広かった。また醤油などの日本の調味料は現地でも購入できるが味に多少の不安があるため、あらかじめ買っておく方が望ましい。

今合宿では釣りをを行った。魚は不確定要素が多いため、あくまで補助的な食糧という事にしていたが、実際は初心者が投げても釣れるほどで、熊の事もあり保存で着ないため、釣っても逃がす事さえあった。そのおかげで動物性タンパク質を十分得る事が出来た。釣った魚は全てフライパンで焼くかホイル包みをして火を通し、生食はしなかった。ホイルは魚だけでなく、ジャガイモやタマネギ等と一緒に包んで焚き火に放り込めばいいだけであったので、なかなか便利であった。以下に釣れた魚を挙げる。

- ・Grayling

最もよく釣れた魚。白身であっさりしている。その為どんな味付けともよくあった。味付けにはニンニク、醤油、バター粉、マヨネーズ、粉チーズ、味噌、塩コショウを用いた。

- ・Arctic Char

Walker Lake で最初に釣れた魚。北極イワナ。身はピンク色。これも Grayling と同様の味付けをした。

- ・Cham (Silver) Salmon

Kobuk 村で1匹釣り、Shungnak 村で1匹もらった。犬の餌にする為 Dog Salmon とも呼ばれる。上記の味付けの他、味噌汁に頭を入れると、とてもいい出汁が出た。スモークサーモンにされているのもこの種類が多かった。

魚だけでなく、合宿前半はブルーベリーが盛りで、茂みに入れば辺り一面食べ放題であったり、村ではスモークサーモンはもちろん、イクラ、狩猟の季節にはカリブーやムースの干し肉をいただいた。補給はしていないが、とても豪華な食生活となった。

医療報告 木下

Fairbanks滞在時に隊員全員が気候の変化に馴染めず体調を崩したが、航行開始後は特に大きな怪我や病気には見舞われなかった。

合宿前半に多かった蚊への対策について、計画段階では痒み止めに重点を置いていたが、一度刺されると諦めてしまう場合が多く、痒さを和らげるのではなく蚊に刺されない事に重点を置くべきだったと感じた。

携行した医療品と使用した頻度

内服薬

名称	用途	数量	使用頻度
パブロンS錠	風邪	100錠	△
パファリン	鎮痛・解熱	100錠	×
新ビオフェルミンS	整腸	200錠	△
抗生物質	細菌による 体調不良	40錠	△

外用薬

オキシドール	消毒	1本	△
サロンシップ	打撲・捻挫	10枚	△
バンテリン	筋肉痛	1本	○
オロナイン軟膏	皮膚疾患	1個	×
ハンドクリーム (ビタミンE配合)	しもやけ防止 肌あれ	1本	△
VロートEX	点眼	1本	△
タクト ホワイトL	かゆみ止め	1本	◎
ウナコーワ クール		1本	◎
エスアランH		1本	△

衛剤

名称	数量	使用頻度
綿棒	30本	○
ピンセット	1個	×
はさみ	1個	△
包帯	3巻	×
ガーゼ	2巻	△
バンドエイド(小)	30枚	△
バンドエイド(大)	20枚	△
テーピング40mm	2巻	△
爪きり	1個	△
サバイバルシート	3枚	×
刺抜き	1本	△
かみそり	3本	△
体温計	1本	×

虫除け剤

DEET20%配合	1本	◎
ユーカリ由来	1本	◎

総重量 約2kg

使用頻度 ◎…よく使用した ○…時々使用した △…稀に使用した ×…全く使用しなかった

尚、合宿前に隊員が受けた予防接種は以下の通りである。

狂犬病	全員
破傷風	
A型肝炎	
B型肝炎	片岡隊員のみ (1年前)

撮影報告

木下

- ・使用機材 Canon AutoboyD5 (フィルムカメラ) ×2 台
 NV-GS150 (ビデオカメラ)
 OC-AVGS150 (ビデオカメラ用防水ケース)
- ・使用フィルム ISO400 27 枚撮り×13 本
 ビデオテープ 60 分撮り×2 本
- ・使用バッテリー (ビデオカメラ用) …連続撮影 2 時間分×1、9 時間分×1

フィルムカメラでの撮影

急速に移り変わる自然や下るごとに変化する川の様相、またその中で奮闘する隊員の様子など、全体を通して満足できる内容であった。

だが、かなりの数の動物を発見したにも関わらず、望遠機能の無いカメラでは極端に近寄らなければならないため、まともに写真に収めることができたのはごく僅かであった。これは出発前から分かりきっていた事だが、実際その状況になるとかなり歯痒い思いをした。価格、防水性、重量等の問題はあがるが、出来ることなら用意して本格的な撮影に臨むべきであったと感じた。

また、合宿開始早々にカメラ 1 台が使用不可能になったため、片方で主に木下が撮影しつつ、もう片方がその補助的な役割を果たすという撮影方式は変更されたが、残りの 1 台で最後まで撮影できたので特に問題はなかった。

ビデオカメラでの撮影

ビデオカメラにはフィルムカメラに無いズーム機能があるので、離れた場所にいる野生動物の撮影が可能であるが、若干それに偏りすぎたと感じた。また動物は専ら航行中に発見していたので船上で高倍率のズームを使う事が多くなり、船の揺れや回転で画面が大きく動き被写体を見失うといった事が何度かあった。これは船を 1 人 1 艇にしたため、撮影を始めると一切の操船が不可能になる事が主な原因と考えられる。

計画段階で最も不安のあったバッテリーに関しては、現地の各村にて充電が可能でありまた仮に充電をしなくても問題無く、かなり余裕のあるものだった。

またビデオカメラ専用防水ケースは、急流区間が序盤ですぐに終了してしまい、その区間での撮影ではケースに付いた小さな水滴や汚れにピントが寄ってしまうため、それ以降は撮影時にケースから取り出すようになるなど、あまり役には立たなかった。

他、全体を通しての反省点として、エスキモーについて積極的に撮影をするという目標を掲げていたが、その機会がやってきてもなかなかそれが出来ず、結果として現地の人々の暮らしについては満足のいく撮影はできなかった。

また今合宿では逆光での撮影がこれまでの合宿の写真と比べて目立った事や、雨・霧の中とはいえ水滴やレンズの曇りで不鮮明な写真・映像が幾らか見受けられるなど、海外まで行って尚、基本的な失敗を犯してしまった。この点に関しては少し注意を払うだけで回避できる類のものであったので悔やまれる。



会計報告 塚本

収入	現金	¥280,000
	カード	¥700,000
		¥980,000

支出

交通費	大阪⇄成田（夜行バス）	¥27,900	
渡航費	成田⇒Fairbanks	¥641,220	
現地交通費	タクシー代	\$61.50	=¥7,319
	Fairbanks⇒Bettles	\$480.00	=¥57,120
	Bettles⇒Walker Lake	\$1,317.00	=¥156,723
	Noorvik⇒Fairbanks	\$1,346.20	=¥16,020
超過料金	日本	¥3,000	
	現地	\$311.84	=¥37,109
小計		¥943,411	
一人当たり		¥314,470	

食費	日本	¥6,237	
	現地	\$305.39	=¥36,341
ライセンス代	釣りライセンス	\$80	=¥9,520
宿泊代	テント泊 1泊1人\$15	\$685.00	=¥81,515
装備費	日本	¥2,532	
	現地	\$230.57	=¥27,438
医療費	日本	¥4,159	
	現地	\$10.58	=¥1,259
撮影費		¥9,791	
保険代	海外旅行者用保険 3人分	¥43,800	
通信費	国際電話、インマルサット使用料	¥13,882	
荷物郵送費		¥6,890	
雑費	土産等	\$9.98	=¥1,188
小計		¥244,552	
一人当たり		¥81,517	

支出総合計	¥1,187,963
一人当たり	¥395,988

●現地交換レート 1米ドル=119円

Innukun の謎

我々はシュグナック村、ノルビック村にて奇妙な話を耳にした。イヌニカン (innukun) という人々に関する話である。以下にシュグナック村診療所のエスキモーから聞いた話を記載する。

People are seeing lots of innukuns lately. How scary. They sure bother someone from Selawik while she was at her camp and they even let her boat float away. She called for help and about 5 boats went to her camp and they seen two of them swim across the river. Noolvic is seeing them in there village. A lady was out smoking a cig really late and said kids were playing out and she told them to home and not play out so late and one of them went up to her face and said they are not kids. Last week or so a plane flying to Noatak said they seen about 200 of them outside of Noatak and they even flew low to see what they were. Gees how scary!

彼らは怪力の小人であり、村人の前に現れては悪戯を働くという。今回の調査だけではイヌニカンが実在のものなのか空想上のものなのかは解らなかった。しかし、このラストフロンティアと呼ばれるこの大地においてイヌニカンの存在は、新たなロマンを与えるものになるであろうと私は思う。

片岡／記

雑感 片岡

どれだけこの大地を夢に見たことか。まだ見ぬ大地に思いを馳せ寝付けぬ夜も沢山あった。思い起こせば高2の帰り道であった。本屋の店先でふと見に止まった雑誌、その中にあったアラスカの数ページを見て以来、私のアラスカ熱は治まることはなかった。気がつけば、買って間もない携帯電話のメールアドレスがアラスカ関係のものになり、本棚にはアラスカの本が増えていた。この部に入部し、ユーコンのアルバムを見た。心底羨ましかった。写真の中のアラスカの大地も素晴らしかったが、それ以上に隊員たちの表情が素晴らしかった。この隊に興味がわき、ユーコンの訓練合宿のアルバムを引っ張り出してきて見てみた。真冬の北海道の川の氷を割りながら航行したり、増水の激流で多くの沈を味わったり数多くの困難にぶち当たっているのだが、過酷な状況の中、独特のユーモアで楽しくやっていた。私はメンバーの重要性に気がついた。

2回生になり、新入生が入部してきた。「アマゾンでカヌーがしたい!」と言う気合たっぷりの子であった。私はこいつならいけるのでは?と思い、蔵書のアラスカの書を貸し与えていた。勿論、ソフトなものからハードなものへ段々レベルを上げて。私の洗脳計画が始まった。2回の秋、モンゴル国オルホン川から帰国後、間も無くアラスカ計画を立ち上げた。メンバーは3名。気がつけば1回のころから苦楽を共にしてきた木下も加わっていた。

2006年、紆余曲折を繰り返し、遠征地は北極圏コバック川に決定した。2月3月に初的大型訓練合宿。厳冬期の琵琶湖を縦断し、川を5つ漕ぎ抜くといった大変過酷なものであった。私はアウトドアに関しては大変なマゾである。実は、この過酷困難極まる合宿が計画段階からとても楽しみであった。OBからの熱い視線を盾に、隊員たちには申し訳ないがウキウキしながら計画を立てたものである。過酷な合宿ではあったが、この航行によって得たものは大変大きい。技術面、精神面もさることながら、隊員同士の結束を強固岩鉄なものにできた。ここに私の目指す「馬鹿だけど愛おしい隊」が完成した。

気がつけば3回生の夏、いよいよ飛び立った。木下と「帰ってこれるのは90%」と真剣に話したのも懐かしい。それから2ヶ月は本当に一瞬であった。いろいろな物をみて多くを学ぶことができたと思う。

あれから半年、私は就職活動、木下は勉学、塚本は主将としてそれぞれの道を歩いている。しかし、あの一夏の思い出、この旅の仲間は、生涯の大きな財産になることは間違いない。

私の残りの学生生活は、木下と共に沢へ再び舞い戻り、優秀の美を飾るつもりである。

雑感 塚本

アラスカへ行ってからすでに半年が過ぎた。しかしそれでもふとした時に Walker Lake に到着したときの景色、ツンドラが一瞬にして秋へと様変わりした景色など、アラスカの大自然を思い出し、微笑まずにはいられなくなる時がある。思えばこのように一つのことにこれほど長期間、そしてこれほど真剣に取り組んだことは、私の人生には今までなかった。

何故あの時あんなにあっさりとアラスカに行くことを決めたのかは、未だにわからない。洗脳がかなりのところまで達していたとしか考えられない。そして春合宿、行くと言ったことを何度後悔したことか。アラスカよりも厳しい状況に本当にくじけそうだった。しかしこの厳しかった二ヶ月は確実に自分の力となった。春合宿を成功させたことでアラスカ合宿へのかなりの自信がついた。

そしていよいよアラスカへ。日本でやれるだけのことはしたものの、やはり不安で、出発前のテンションは最悪であった。それをお酒の力を借りて何とか出国。しかしそれもアラスカに降り立った瞬間一変してしまった。日本ではありえない広大な景色に自然とテンションは上がり、冬、春、GW 合宿、その他様々な時を経てここに居るのだと思うと、いてもたってもいられなくなるような気持ちだった。

アラスカで一番の事件といえば Ambler からの逃亡劇だが、私は実際何もしていない。小屋の中に薬物中毒者と二人きりにされ、何かしらやられる…と怯えていたのもつかの間、先輩方に起こされるまで爆睡していた。その後、寝起きの状態で訳もわからずオーロラの下、コバック川を流れていた。その時の先輩方の行動力には感心するが、あの時私が死んでいたら、未代まで呪っていたと思う。

アラスカに行く大きなきっかけとなった写真家、星野道夫さんの本の中に、「さまざまな人生の岐路に立った時、人の言葉ではなく、いつか見た風景に励まされたりすることがきくとある。」とあった。私はこのアラスカ合宿でたくさんの励ましてくれる風景を得た。そして風景だけでなく、この約一年間を通して得た様々なものは必ず私の力になると思う。

最後になりましたが、感情の起伏の激しい私に呆れず怒らず、この約一年間一緒に過ごした先輩方、本当にありがとうございました。普段とは違う表情をたくさん見せていただきました。格好良かった！この先こんな素敵な男性方はそう現れないと思います。

雑感 木下

今回の遠征における山場は第一に Ambler の逃亡事件、次に熊との初遭遇あたりが挙げられると思われるが、個人的な最大の山場は出発前日のパスポート紛失事件だった。最後の準備をしていると、ふと一番なくてはならないパスポートさんが無い事に気付いて、家を探して部室を探してまた家を探して隊員達とも連絡を取りつつまた学校へ行って部室を引っ掻き回した挙句にやっと発見したのだが、二回目に学校へ向かう途中の電車の中で「これでもし見つらんかったら大学辞めて鹿児島あたりに逃げよう」などと本気で考えていたぐらい、その時に感じていたストレスは尋常のものではなかった。そして遠征に出発する前から既に未曾有の危機に直面し、しかもそれを無事乗り越えることが出来たので行く前からもう何かをやり遂げた心境だった。アラスカに着いても、既に事は半ば成った様なつもりでいたので気持ちに妙なゆとりがあり、アラスカの自然、Fairbanks の街を心から楽しめたと思う。

また、改めて考えてみると遠征の準備期間に約一年を費やしているが、その間に練った計画、凍傷になったり低体温症になったりした練習、あと毎日々々悩まされ続けた金の工面に全精力を注ぎ込み、出発前には燃え尽きてしまってアラスカに行ったときにはただの燃えカスだったとも思う。祭りは準備が楽しいといった様な言い回しか何かにも通じるものがあるかもしれない。勿論祭り自体も面白いけど、自分にとって「アラスカ遠征」と聞いて思い浮かぶのは、計画発起から企画、練習、準備と実際の遠征を経て、久しぶりに家に帰って飼い主を忘れた愛犬にもの凄い勢いで吠えられるまでの一年間全ての事であって実際の遠征だけの事ではなく、そう考えると一年間の内の二ヶ月はほんの少しで、行く前から半分どころかほとんど終わっていた。そんな「あとは行くだけ」といった考えも気持ちにゆとりを持たせ、どこへ行っても我が家のようにくつろぎっぷりでアラスカの雄大な自然を堪能できた。とりわけ、マリファナ中毒者の一挙手一投足に細心の注意を払いつつ夜陰に乗じて脱出、濃霧で視界が狭い中をオーロラの薄明かりを頼りになんとか現在地を把握しつつ遠くへ遠くへ、という逃亡は非常に神経をすり減らすものであり、次のテン場で一旦泥のように眠りこけた後に目が覚めたときの見事な晴れっぷりと抜群の眺め、もう銃や人間に恐れる事も無いという三重の開放感は筆舌に尽くしがたいものだった。万が一追いかけて来たら 100%見つかったのだが、そんな事はどうでも良いぐらい素晴らしかった。単位、将来、借金。そんなしがらみを全て忘れさせてくれるアラスカの大地に是非もう一度行きたいものである。

また最後に、自他共に認める怠け者、無気力人間である自分がなんだかんだで海外に行ってしまったのは CL、SL 両名の多大な努力の賜物で、よくぞあそこまで引っ張ってってくれたものだと感心するばかりです。渡航、現地の事について任せっきりにしてしまった事が今合宿では個人的に唯一悔やまれる点でした。